



通信

2025.10.31 No.187

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: http://svcf.jp

転居された方は事務局(svcf-admin@svcf.jp)まで転居先をお知らせください

12月(第153回)院内集会

第153回院内集会は下記のように行われた。

- 日時:2025年10月30日(木曜)11:00-12:40
- 会場:参議院議員会館 B109 会議室
- 講演題:「東日本大震災から考える防災と社会課題」
- 講師:木村 紀夫氏/大熊未来塾代表理事

木村 紀夫氏

福島県大熊町の海沿いにある熊川地区で生まれ育つ。東日本大震災の津波で自宅は流失し、父と妻、次女が行方不明になったが、東京電力福島第一原発事故により捜索が打ち切られ、その後、次女の汐風(ゆうな)さんの遺骨の一部が発見されるまで5年9か月を要した。

避難していた長野県から現在は福島県いわき市に拠点を移し、中間貯蔵施設区域内に含まれてしまった自宅跡に通い捜索は継続中。その傍ら、自分の経験から次の災害で命が失われないこと、誰も犠牲にしない社会の構築について考える語り部活動を続けている。

【講演要旨】

3人の家族を失った経験から、以下5つの教訓(お願い)を提示したい。

<防災の教訓と提言>

1. 「津波てんでんこ」の教訓を活かし、災害前の平和なときに「助けに行かない」ことを家族と共有しておく。
2. 学校の防災マニュアルに「災害時に児童を親に『引き渡さない』という選択肢があることを盛り込んでおくこと含め、臨機応変に対応できる体制を整備する。
3. 過去の災害(貞観地震など)を教訓とし、東日本大震災の経験を千年先まで伝えて各地域での防災対策に繋げる。
4. 津波被害から人々を救った鎮守の森(諏訪神社)の例から、自然に近い生き方をすることで、危険を察知し「違う」と主張できる社会を目指す。
5. 人が住まない中間貯蔵施設のあるようなエリアに建設された防潮堤は無用なものであり、公共事業のあり方に疑問を呈する。役人たちはなぜこの工事が必要なのかを考えない。むしろ、高台への避難意識を高める方が有効である。

<原子力災害と現代社会への問題提起>

- 原発事故が発生したことにより地震/津波被災者の捜索が妨げられた。このことから、「原発事故で亡くなった人はいない」という東電側の表現に疑問を呈したい。
- 東電社長は「電気を作ることは命を守ること」というが、わたし自身は4年間電気を買わない生活を送ってきた。その経験から、原発の目的が「生きるため」ではなく、「生活を楽しむための消費」やAI(Chat GPTなど)の膨大なエネルギー消費のためではないか。
- 電気使用の裏側には、ウラン採掘場での被曝や次世代への核のゴミのツケという犠牲があることを強調したい。
- 便利さに慣れた現代社会の生活を見直し、「本当に必要か」を各自が考えることが、原発をなくす一歩に繋がる。
- 震災の犠牲者の遺骨が、復興のための防潮堤や造成された街の下に残っている現状を「復興と言えるのか」と言いたい。



<大熊町の復興の現状と矛盾>

- 大熊町は一部地域の避難指示が解除されが、実際に戻ってくる人は少ない。1,300 人が戻っているというが、そのうち 500 人くらいは東電社員など県外の人だ。町民になっているのが約 800 人だが、うち 500 人ほどは元の町民が戻ってきたのではなく、新たな移住者だ。元の町民は 300 人余りに留まっている。避難させられた町民の多くが戻るに戻れない状態になってしまっている。
- 汚染廃棄物を保管する中間貯蔵施設が原発周辺に設けられ、その用地の所有権者の 8 割が国に先祖伝来の土地を売却・貸与した。この「中間貯蔵」と称するところに集められた土砂は「2045 年までに県外で最終処分する」ことになっているが、県外搬出をめぐる家族の中に断層が生じている。そんなことなら「中間」ではなく「最終処分場」にしてしまったらどうかとも思う。ただし条件がひとつある。どうしてこうした施設がつくらなければ

ばならなかったかについて全国民が理解してくれるようになることだ。そのための「学びの場」となることを望む。

- 復興予算により、新役場や「おおくまーと」など豪華な施設が作られる一方で、耐震性のある図書館や文化センターなど、住民にとって大切な公共施設が解体されてしまった。ハコモノがどんどん建設される様子は、原発誘致による箱もの建設と同じで、震災の教訓が活かされず「記憶としかされてない復興」であると感じている。
- 津波犠牲者の慰霊の場がなく、阪神淡路大震災につながる「希望のあかり」が CO2 排出を理由に昼間は消灯されている。おかしい事だとつくづく思う。

【質疑】

質問：木村氏の活動は高く評価するが、直接批判的なスタンスを取らないでいることが国や東電が原発を再稼働させる上で都合の良い活動になってはいないか。

木村：ストレートな非難をすることはしないが、語っている内容は批判そのものである。活動の目標は一人ひとりに変わってもらうことであり、長い目で見ればそのほうが効果がある。

質問：木村氏の＜未来塾＞のほかにも＜福島再生の会＞や＜福島ダイアログ＞といった他の団体との連携の可能性はあるか。

木村：＜福島ダイアログ＞の安東さんとは、来年度自宅周辺の線量調査をする話を進めている。

熊が出た！

安藤 博

炎天下の作業を避けしばらく福島から遠ざかっていましたが、10 月 16 日から 20 日までの四泊五日、安藤、家森、岡山、加藤、杉山、山田の 6 人で福島行動に出向きました。

さすがに晩秋の東北福島。早朝の作業で寒さに震えました。ひさびさの福島行きだったこともあり、短い間ながらこれまでの活動の継続と新たな展開、旧知の人びととの久闊を叙することも出来ました。

「熊が出た」と現地の方が言いました。大熊町で作業に当たっていた日の数日前に一頭が捕獲され、しかし他にも一頭が見かけられていて、それも同町の常磐線大野駅近辺だったとのこと。日本全国に熊！わたしたちの活動地も例外ではないようです。

フランスから大熊町に移住して来て果樹園造りに励んでいるエミリーさんは、＜天の川農園＞の新たなフェンス敷設にかかろうとしていて、その敷設作業を頼まれました。縦約 1m50cm、横幅約 2m の目の粗い金網(メッシュ)を鉄棒の柱につないでフェンスとしそれを横へ横へと延ばして農園を囲むイノシシ除けの防壁(メッシュフェンス)にする作業です。私たち行動隊の作業で昨 2024 年末までに周囲約 400m のフェンスが出来ていましたが、今度はその 2 倍の広がりの方壁を敷設する作業です。2026 年春くらいまでの完成を目指しています。今回はほんの序の口で、他のボランティア団体の協力もあるとして、少なくとも後 2、3 回、5 人で延べ 10 日の作業が要りそうです。



かわうちワイナリーのブドウ収穫作業はいつものように朝 7 時からで、ワイナリー近くの宿舎で 5 時前から朝食を摂り 6 時半にはブドウ園に上がって行きます。今回は、雨で収穫作業が出来なくなる日も見込んで 17 日の夕刻に大熊町から川内村に移り 20 日の月曜日まで腰を据えました。結果的に収穫作業は 18、19 の二日間。20 日は冷たい雨が降って”失業”となりました。

収穫は、白ワイン用のシャルドネ種ブドウが前年の半分以上。赤用メルローは前年同様の出来ばえでした。



収穫作業に加わった 6 人、皆それぞれの流儀で鋏を使っている、その様子が見事な写真になっていますが、6 人のうち一人だけ家森さんの写真がありません、写真撮影者だからです



かわうちワイナリーの事業は、ブドウ樹を育て収穫したブドウからワインを醸造して製品とする製造段階から、作ったワインを売って現金収入を得るための営業展開を主とする段階に入っています。900 円台のコンビニワインでも十分飲めます。川内ワインは赤、白 3,600 円くらいで売っています。今回収穫作業に加わったボランティア向けに「臨時特価サービス」をやっていたので営業協力のつもりで買いました。しかし 6 本で 16,500 円ですから一本 2,750 円。安売りでは南米、南アなどから輸入されてくる 1,000 円未満のものには太刀打ちできないので、上質・中クラスとして 3,000 円台の値付けになっているわけですが、1,000 円で買えるものを 3,000 円を買ってもらうのがいかに難しいことか。作業支援に関わってもう 10 年近くになるこの事業の今後がとても心配です。



収穫作業は午前中だけなので、18 日土曜日はワイン会社の醸造技術者が作ってくれた昼食のおいしいカレーをいただいたあと、車で 1 時間ほどの双葉町の福島県立伝承館で開催されていた「furusato 意見交換会 中間貯蔵と除去土壌の行方を決める前に話しとくべきこと」に参加しました。ここで、大熊未来塾代表理事の木村紀夫さんや、木村純子さん、いわき湯本の旅館古滝屋の社長里見喜生社長などにお会いすることができました。

5 年ほど前<大熊町ふるさと応援隊>理事長の渡部千恵子さんが建設中のこの貯蔵施設に車で連れて行って見せてくれたのですが、ダンプとベルトコンベアで土砂が運び込まれ巨大な構造物のような「施設」が構築されていく様子を目の当たりにして「これが『中間』とは、とんだまやかしだ」と思いました。運び込まれた土砂は、最近までに約1,400万立方メートルと言われています。

2025 年 7 月に首相官邸の中庭に中間貯蔵施設から 2 立方メートルの土砂が搬入されたことを、政府は大いに宣伝しています。しかし、最終処分に向けて土砂を受け入れる「県外」などあるでしょうか。これは沖縄の米軍基地を受け入れる「沖縄県外」や東電福島第一原発の放射性廃棄物を受け入れる「福島県外」と同じで、「中間」と称する

「意見交換会」には40人ほどが参加していましたが、「法律で定めているとおり土砂は『県外』に移し土地は元通りにして返却せよ」といった声が地元の人たちから出ると予想していました。ところが予想に反して「貯蔵土砂は動かすな」というのが会場の空気でした。

木村純子さんはもっと積極的に「地球が必要としている緑地として保存し”育てて”いかねばならない」と発言しました。

「中間貯蔵施設を無残な廃棄物の集積ではなく、地域の復興につながるようなものとしていくための事業が行われることになれば、行動隊としても何らかの形で加わりたい」との思いで、たまたまの余裕時間で参加したこの集まりの会場をあとにしました。